

## 伝統と現代の狭間で

### —張恨水『啼笑因縁』と『金粉世家』を中心に—

林麗婷

#### 一 はじめに

張恨水（一八九五～一九六七）は近代中国の通俗小説の大家であり、生涯三千万字にも上る創作を書き残した。一貫して章回小説という体裁で小説を書いた点からすれば、張恨水は伝統的な文人といえよう。一方、張の小説は往々にして北京や上海などの都市生活を描き出しており、現代を生きる人々の姿を書き写したものである。本報告は張の初期の代表作『啼笑因縁』と『金粉世家』を中心に、通俗小説における女性と恋愛と現代の問題を考える。また、パネルディスカッションのテーマに合わせて、小説における上海と北京の表象を考察する。

#### 二 十三妹と閔秀姑

『啼笑因縁』（一九三〇）は北京を舞台とした恋愛小説であるが、上海『新聞報』に連載されていた。粗筋は次のようなものである。

杭州出身の青年の樊家樹が受験のために北京の従兄宅に寄寓し、天橋で武俠の見世物師閔寿峰と知り合い、閔寿峰の娘の秀姑に慕われる。一方、家樹は大鼓書を歌う少女沈鳳喜と相思相愛の仲になり、鳳喜を女学校に通わせるなど経済的に援助する。また、従兄夫婦の友人であるモダンガールの何麗娜も家樹に好意を寄せ、積極的に家樹に接近しようとする。ところが、家樹が帰省していた間に、鳳喜は軍閥の將軍である劉徳柱の継室になり、家樹と縁を切った。しかし鳳喜は劉に虐待されるようになり、発狂してしまう。閔寿峰父娘は劉を暗殺したのち、北京から姿を消した。しばらく経ったころ、家樹が匪賊に拉致されたことを知った二人は再び家樹を救うために現れた。さらに、秀姑は家樹を麗娜と再会させ、二人の恋愛を成就させようとした。

これまでの研究においては、ヒロインの沈鳳喜が注目されてきた。阪本ちづみは鳳喜が狂ったことは「金に走った罰としての狂気」だと指摘している。また、許子東は鳳喜の「墮落」について、「（作者）は下層の女性の道德の欠陥を浮き彫りにし、小市民の虚栄の夢

を満たしながらそれを諫めた」としている。

しかしながら、鳳喜や家樹を救い、家樹と麗娜の恋愛を成就させるなど、秀姑こそが『啼笑因縁』で最初から最後まで主体的に行動し、物語を推し進めた人物である。『啼笑因縁』を読み解くには、秀姑の人物造形を分析する必要がある。

秀姑の造形を考えるとき、『兒女英雄伝』のヒロインの十三妹との関連性を抜きには語れない。というのは、語り手が秀姑を語るとき、十三妹に言及することが多いからだ。第四回で、家樹が秀姑に『兒女英雄伝』を貸すシーンが描かれる。秀姑は熱心に読みながら、「もしかして彼の家にはすでに張金鳳がいるから、わざとこのような本を私に読ませるのかしら」と家樹の意図を探った。また、家樹は秀姑について、「秀姑の立場はもちろん十三妹に似ていないが、彼女の（僕に対する）懇意は十三妹が安公子、張姑娘に接したときのそれに勝るとも劣らないものだ」と頭を悩ませる。もともと重要なのは、小説の最後で秀姑が家樹に残したメッセージに、「何小姐から聞きましたが、あなたは十三妹の後半（の生き方）に賛成しないですつてね。あなたは優しいし、眼識もおありです。これ（秀姑の写真）を記念になさってください」とやはり十三妹を持ち出していることだ。張恨水は意図的に十三妹と重ねて秀姑を描いたのである。

『兒女英雄伝』では、十三妹こと何玉鳳という女侠が偶然に読書人の家庭の若旦那である安驥を盗賊から守り、さらに安を田舎娘の張金鳳と結婚させる。母の病死後、十三妹が亡き父の仇を取るために出発しようとしたとき、安驥の父、進士の安学海が現れ、十三妹を説得して息子に嫁がせた。かつての女侠はのちに士大夫の側室

になるといふ結末を迎える。

武術に長け、正義感が強い秀姑は確かに十三妹を彷彿とさせる。家樹と麗娜の恋愛を成就させようとしたのは、安驥と張金鳳の仲を取り持った十三妹に自分を重ねているのだろう。しかしもともと官僚の令嬢で教養が高い十三妹と比べると、秀姑は平民ないし下層の庶民の出身で、小説ぐらいいは読めるものの、才女とは程遠い女性だ。そのため、家樹は秀姑が『劉香女』（宝巻の演目のひとつ）を読んでいるのを見て、それはつまらないからと言い、彼女に『兒女英雄伝』を勧める。また家樹は麗娜と劇場で『能仁寺』を見ながら十三妹の結婚について議論し、次のように述べる。

「世の中の事には十全なものはない。この十三妹は、『能仁寺』の一幕では実にはつらつとしていて。しかし惜しむべきことに、『兒女英雄伝』の作者は無理矢理に十三妹を安龍媒に嫁がせて、安の第二夫人にしてしまった」。

家樹は十三妹の結婚について否定的な感想を漏らす。つまり、颯爽とした十三妹が結婚によって家庭に囲い込まれる女性になったのが面白くないと考えたのだ。しかし、家樹は鳳喜と恋に落ちたものの、秀姑の腕を見て現代女性の筋肉の美を感じるなど、時々秀姑にエロティックな視線を投げかける。鳳喜への思いを諦めたあと、家樹は秀姑と麗娜の二人の間で悩むようになる。一方、秀姑は麗娜から家樹の十三妹についての感想を知り、十三妹と異なる道、すなわち結婚をしないことを自ら選んだ。あるいは、秀姑は家樹の話に啓発されたとも言える。その結果、秀姑は家樹のそばを離れた。

秀姑は伝統的な佳人でも現代の新女性でもない。家樹と公園へ散歩することを夢見るような、いわゆる恋愛に憧れるという女性らしい一面もあれば、劉徳柱を暗殺して壁に血書を残し、家樹を驚かせる勇ましい一面もある。逆に家樹は関寿峰父娘の殺人を知り、自分が巻き込まれるのを恐れて天津に逃げるといふ滑稽なエピソードが描かれる。

張恨水は『啼笑因縁』を書き終えた後、「秀姑を登場させる前から、彼女を誰とも結婚させまいと決めていた」と述べている。また、『啼笑因縁』の主人公の行方について、張恨水は「関秀姑の行方はこれ以降も明かさない。もし読者の皆さんが彼女に帰ってほしいとお考えでしたらご想像にお任せする。ただ絶対に女侠の潔白を汚さないでほしい」と読者に強調した。恋愛結婚は女侠の潔白を損なうものであるのか。張恨水は秀姑に女侠という身分を与え、結婚しなくて良いという女性のあり方を提示した。より踏み込んでいえばむしろ、結婚してはならない女性を造形したのである。

許子東は五四以降の恋愛小説によくあるパターンとして、ヒーローによるヒロインの啓蒙を指摘した。家樹と秀姑の話もこのような恋愛小説のバリエーションだと考えられる。張恨水は『児女英雄伝』のパロディによって、新・旧の間を生きる女性に結婚以外の選択肢を示したので。

### 三 清秋、小憐、翠姨の家出

『金粉世家』(一九三二)にも、古くもなく新しくもないヒロインの冷清秋が登場する。女学校に通い、断髪をし、ファッションを

好む清秋は民国の新女性といえよう。しかし、女学校に通いながら、清秋は新文学、新思想に無関心のように、古詩文に長けている伝統的な才女でもある。濱田麻矢は清秋の造形について、「(作者の)意図は彼女に「きちんとした女学生」という新奇な身分を与えることにだけある」と指摘しているが、的を射た意見であろう。

清秋は国務総理の金銓の末息子の金燕西と自由恋愛を経て結婚したものの、幸せな日々は長く続かない。燕西は「社交公開」を口実に芸者と遊ぶなど道楽に耽る。金銓が亡くなったら、金家は分家し、燕西はますます金遣いが荒くなる。清秋と燕西は度重なる喧嘩で別居した。ある日火事が起きて清秋は乳児を抱えて行方不明になるが、しばらく経つと金家に手紙を送り、離婚の意思を表明した。すでに黄芳が指摘しているが、清秋の行動はノラの家出と相通じるものがある。

五四以降の新文学においては、自由恋愛をテーマとする小説が多い。しかし、青年男女が自由恋愛のために古い家庭と決裂することと焦点化されており、恋愛の失敗を描くものはさほど多くない。その意味で、張恨水が恋愛結婚に失敗した清秋に離婚の選択肢を与えたことは注目すべきだ。しかしながら、離婚を選んだ清秋のそのあとの境遇は惨めなものとして語られる。それは早くも小説の冒頭で示されたように、清秋が路上で対聯を書くなど代筆の仕事で口を糊する描写からも一目瞭然だ。張恨水は女性が自由恋愛に失敗したらどれほどひどい目に遭うかということを読者に示したので。

『金粉世家』にはほかに家出が描かれている。金家の長男の鳳挙の嫁である、呉佩芳には小憐という侍女がいた。その小憐と洋行帰りの柳春江の駆け落ちである。巴金の『家』の鳴鳳という侍女

が人の妾になることを拒否して、自殺に至ったことはよく知られている。それに対して、小憐は好色な鳳挙の露骨な言動から身を守りながら、柳春江と文通をし、ついに金家から逃げ出した。小説の後半で、小憐夫婦は金家を訪れるが、佩芳は息子に小憐を「おばさん」と呼ばせた。昔の主僕は姉妹のような関係になったのである。

小憐の恋愛は成功を遂げたものとして描かれる。自らの運命を嘆く悲観的な鳴鳳と比べると、柳と大胆に文通をし、冷静沈着に家出を計画する小憐は幸せを手にすることができたといえる。ただ、近代教育を受けていた金家の娘たちが、小憐の恋愛を間接的に推し進めたことも彼女の恋愛の成功には関わっている。金家の五女の敏之と、六女の潤之はそれぞれ、アメリカとフランスに留学した新女性であり、八女の梅麗は女学校に通っている。小憐と柳の出会いには小憐が佩芳の代わりに令嬢に扮装し、梅麗と共に結婚式に参加したことがきっかけである。柳は小憐と再会したくて金家の娘たちを会食に誘うが、姉妹三人は鳳挙の意に染まないのであることを承知しながら小憐を連れていった。

伝統的な才子佳人の小説では、侍女は佳人と才子の仲立ちをするが、小憐の場合は、令嬢が侍女と才子の恋愛を助けている。張恨水はありふれた才子佳人の話を転倒させて、侍女の家出を描いたのである。しかし、家出した少女はやはり結婚によってもう一つの家庭に組み込まれてゆくことも見過ごすわけにはいかないだろう。

『金粉世家』にはさらに二人の家出が描かれている。一人は鳳挙の妾の、かつて娼婦だった晚香である。彼女は鳳挙が上海に出張している間に、妾宅のありったけの財産を持ち出して逃げ出した。もう一人は金銓の妾の翠姨である。彼女は夫が亡くなったあとに、

やはり財産を持ち出して上海へ逃げた。特に翠姨は逃げる前に、上海の友人と手紙の遣り取りをし、財貨の売り払いについて相談していた。張恨水は強欲な晚香と翠姨の家出についての風刺と蔑視は隠さないものの、家長が亡くなり、大家庭で孤立した妾のよるべなさを如実に表現したとも言える。

#### 四 上海へ、外国へ

『啼笑因縁』は北京を舞台に物語を展開させている。高級住宅街や北京飯店、中央公園や北海公園、大道芸人が集まる天橋など、異なる階級の人々が楽しめる様々な場所や風景を小説に取り入れ、おり、上海の読者に北京を案内する旅行ガイドの役割を果たしている。注意すべきは、家樹には杭州に帰省したり、天津に行ったりする描写があるが、女性の登場人物は北京を出ることがなかったことである。鳳喜が精神病院に入院したことや、秀姑が劉徳柱を暗殺し身を隠したこと、麗娜が失恋のために西山に隠遁したことなど、女性の移動はある意味で消極的なニュアンスを帯びる。つまり、『啼笑因縁』では、女性の移動はあまり良しとされないのである。

『金粉世家』は北京を舞台とするが、上海に言及する箇所がいくつもある。たとえば、金家の侍女の阿因が燕西に手紙の代筆を頼むエピソードがある。阿因は「上海という場所は賑やかすぎて、あなたのような正直者は無駄遣いをしがちだ。誠実でない人とは付き合わない<sup>(16)</sup>」と恋人に注意を促す。また、燕西は上海からやつてきた芸者の白蓮花に「上海から来た人は多少ずる賢い」と話した。また、燕西は白蓮花と白玉花の姉妹に振り回されたように描かれてい

る。つまり、上海は人を墮落させるような場所として表象されているのである。また、すでに述べたように、上海は女性の逃げ場所として表現されている。小説では明示こそされないものの、翠姨は上海で墮落する可能性が仄めかされている。

一方、清秋は金家から出たものの、北京に残っている。小説の冒頭で、清秋は貧しい生活であつても金家と関わりを持つ人を選べたがっている人物として描かれている。しかしそうだとすれば、いっそ北京を離れるべきであろう。もちろん清秋が北京にいなければ語り手は彼女に出会えず、物語も始まらないという表層的な理由は説明できる。しかし、より深層の理由としては、張恨水は清秋のありかたをより感傷的、道徳的に表現しなかったというものがあると考えられる。つまり、彼女が北京に居続けることは、恋愛結婚に失敗しても決して新しい恋愛を始めようとしないうことを象徴的に語っているのである。それは同時に、張恨水の現代を生きる女性に対する想像力の欠如の証でもある。というのは、張恨水が家出をした女性に用意した道は、結婚か、墮落か、あるいは貧困かというもので、才能を発揮し働いて尊厳のある生活を過ごすという可能性はそこには見出せないからだ。

『啼笑因縁』と比べると、張恨水は『金粉世家』に、外国のことを積極的に取り入れており、読者により広い世界を見せようとしている。舞台である北京以外にも、登場人物が滞在したドイツや、日本、アメリカ、フランスのことが話題に上っている。さらに、主人公の燕西はドイツに留学し映画を学ぶことになる。帰国後は、清秋との恋愛を繰り返し映画にし、自らは主人公として出演した。ただし、この主人公は愛のために辛酸をなめた男性として表現されて

いるのに対して、ヒロインは夫のことを理解せず、ヒステリーのあまり家に放火してしまふような女性として造形されている。燕西は伝統的な詩文は作れないが、西洋映画の知識と技術を獲得して自分を悲恋のヒーローとして演出し、多くの女性の同情を得た。一方、清秋は詩文を書き続けたが、誰にも見せないように引越しの前にノートを燃やした。伝統的詩文は現代の映画の前には無力であるようだ。清秋も燕西の映画を見ながら、涙を流したのである。

「付記」本稿の一部は拙稿「ポスト五四を生きる—張恨水『金粉世家』と『啼笑因縁』を中心に—」（『日本中國學會報』第七十四集に掲載）と重複していることをお断りしておく。

※重複の箇所 第二節、秀姑と十三妹との比較、第三節、小憐についての分析の一部。

《注》

- (一) 阪本ちづみ『張恨水の時空間—中国近現代大衆小説研究（勉誠出版、二〇一九年）一〇四頁。
- (二) 許子東「一個故事的三種講法…重読『日出』、『啼笑因縁』和『第一炉香』」（『許子東講稿 卷二…張愛玲 郁達夫 香港文学』に収録、人民文学出版社、二〇一一年）四六頁。
- (三) 張恨水『啼笑因縁』（人民文学出版社、二〇一八年）五三頁。
- (四) 張恨水『啼笑因縁』、二六七頁。
- (五) 張恨水『啼笑因縁』、三三〇頁。
- (六) 張恨水『啼笑因縁』、二六六頁。
- (七) 張恨水「作完『啼笑因縁』後的説話」（張占国、魏守忠編『中国現代文学史資料 滙編 張恨水研究資料』天津人民出版社、一九八六年）二

四三頁。

(八) 張恨水「作完『啼笑因緣』後的說話」、二四五—二四六頁。

(九) 許子東「一個故事的三種講法…重讀『日出』、『啼笑因緣』和『第一炉香』」、五三一—五四頁。

(一〇) 濱田麻矢「青い服の少女—張恨水、張愛玲における女学生イメージ

—」(東方学研究集刊行會編『高田時雄教授退職記念東方学研究論集「日英文分冊」』二〇一四年六月) 一九九頁。

(一一) 黃芳「娜拉的出走：對冷清秋悲劇命運的思考」(『電影文學』第二〇期、二〇〇七年)、八二—八三頁。

(一二) 張恨水『金粉世家 上』(人民文學出版社、二〇一八年) 一七〇頁。